

教長の和歌の世界

西村 洋子

〔抄録〕

藤原教長は平安末期の動乱期を生きた歌人であり、私家集『貧道集』を残している。その和歌の詠風に盛りこまれた世界を通じて、教長にとっての和歌はいかなるものであったのかをみていくのが本稿の目的である。その方法として、やはり同時代を生きた藤原俊成の庶機する詠風をみ、貫之、業平の受容の相違、「あは

れ」観を通じ、比較することにより俊成とは対極的に位置するであろう教長の和歌の世界が浮かびあがってくる。人生の悲嘆をほかすことなくリアリズム的な手法で謳いあげる時、教長の和歌は他の追隨を許さない迫力と存在感があるといえよう。

キーワード…教長、貧道集、俊成

はじめに

- 一 教長と俊成の貫之受容
- 二 教長と俊成の業平受容
- 三 教長と俊成の「あはれ」観
- 四 晩年の生と死
おわりに

はじめに

教長は平安末期の動乱期に崇徳院の近臣として生きた歌人であり、『貧道集』という歌集を残している。保元の乱に巻きこまれ劇的な人生を生きた教長はどのような和歌を詠んでいるのか、それは同時代を生きた他の専門歌人とはまた自ずから詠風が、庶機する和歌の世界が異なるはずである。そこで本稿では教長の和歌の特性を浮かびあがら

せるために、専門歌人として生きた俊成との比較を試み、さらにその上で、深く教長の和歌と人生の関係をみてみたい。

一 教長と俊成の貫之受容

教長と俊成はともに『古今集』を尊重し、その中でも貫之をそれぞれ、『古今集註』『古来風体抄』でとりあげている。以下、二人は貫之のどの歌を評価しているのかをあげる。

教長は治承元年（一一七七）六十九歳の九月十二日から二十四日まで、守覚法親王に『古今集』の講釈をした。その聞書が『古今集註』

として残っている。本来全講であるが、現存する京都大学所蔵の孤本には脱簡があり、その全容を知ることとはできない⁽¹⁾。しかし、現在知られる教長の『古今集註』を通して、彼の和歌に対する考え方の一端をうかがえよう。

教長はその中でも貫之の歌を非常に虚機していたことがわかる。次に具体的にあげてみる。

ゆきのふりけるをよめる

①霞たちこのめもはるの雪ふれば

花なきさとも花ぞちりける（春・九）

ハルヲハ、キノメハルコトナルヲ、キノメトモハルノト、リテ、ユキノフルヲ、ハナトミテ、ハナ、キサトナレド、ハナノチルトヨメル、ハジメヲハリ、カケアヘリ。ウタノ本トイフベシ。ヲホカタ、ツラユキノウタノアリサマニテ、カク、ハナ、キサトニトイヒヲキ

テ、ハナチルトヨメル、タシカニヨメリ。コレノミニアラズ、^④ミヅナキソラニナミヅタチケル、トイヒテ、^⑤ソラニシラレヌユキトヨミ、^⑥ヤマトニハアラヌカラコロモト、カクタシカニコトヲ、クナリ。

右の④は「さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに浪ぞたちける（古今・89）、⑤は「桜ちる木のした風はさむからで空にしられぬ雪ぞふりける（貫之集・818）、⑥は「しきしまややまとにはあらぬ唐衣ころもへずしてあふよしもがな（古今・697）のことである。

はつせにまうづるごとにやどりける人の家にひさしくやどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじかくさだかなむやどりはあるといひいだして侍りければ、そこにたてりけるむめの花ををりてよめる

②人はいさ心もしらずふるさとは

花ぞ昔のかににほひける（春・42）

コノウタニハ、心ミナコトバニアラハレテ、カクレタルトコロモミエズ。コトバニカクサダカニナンヤドリハアル、トイエル、ヒサシクキタラヌヲウラミテ、タガハズヤドハアリトイヒタルヲ、ヒトハイサ、トヨメルナリ。マコトニシカアルベキコトニナム。

池に月の見えけるをよめる

③ふたつなき物と思ひしをみなそこに

やまのはならでいづる月かげ（雑上・881）

ヤマノハニ、ツキハイヅトオモフニ、ミヅノソコヨリモイヅルハ、
フタツ月のアルカ、トウタガヘルナリ。文章のナラヒ、カクノゴト
シ。

①②③の歌の註で教長は「ハジメヲハリ、カケアヘリ。ウタノ本ト
イフベシ。ヲホカタノツラユキノウタノアリサマニテ……タシカニヨ
メリ。……カクタシカニコトラ、クナリ」「コノウタニハ、心ミナコ
トバニアラハレテ、カクレタルトコロモミエズ。コトバニカクサダカ
ニナンヤドリハアル」「文章ノナラヒカクノゴトシ」と言っている。

また『古今集』の345番のよみ人しらずの註においても

公任卿ノ、ウタノコトモイヘルニ、コトバモツヨク、心モアマリ
アレバコソヨケレスエノウタヨミ、サモナクシテ
と、やはり「コトバモツヨク」と述べている。

公任は『前十五番歌合』において、貫之の代表的秀歌として、先に
①の教長の註で述べている例歌の一つである⑧と同じ歌の「さくら散
る木のした風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける」（一番の左）を
あげている。このことは清輔の歌論書である『袋草子』にも「貫之桜
散歌、古今集并後撰」、而四条大納言為「貫之第一秀歌」と言ってい
る。清輔は教長と共に俊成の『正治奏状』で「教長と申候し者。私の
打聴に捨遣古今と名づけて、集撰たる事候き。其時清輔。彼につぎた
る者にて、かたはらにそひ候て、もろともに仕て候し。誠にみ苦しき
事にて候き」と厳しく批判されている六条家の専門歌人である。また

顕昭も『顕昭古今集註』七四七番（月やあらぬ……）において「貫之
が歌などのやうにたしかに」と述べている。定家の『近代秀歌』では
「貫之、歌の心たくみに、たけ及びがたく、ことは強く姿おもしろき
様を好みて、余情妖艶の体を詠まず」と述べている。

以下みてきた中で教長の貫之評価のその根本は公任の貫之評価と呼
応していることが和歌史的にうかがえる。教長は貫之の歌を「文章ノ
ナラヒカクノゴトシ」「心ミナコトバニアラハレテ、カクレタルトコ
ロモミエズ」「タシカニヨメリ」「ハジメヲハリカケアエリ。ウタノ本
トイフベシ」という所を最も評価し、教長の庶機する和歌観がうかが
える。

さて、次に俊成は貫之の歌をどのように受けとめていたかを『古来
風体抄』の中よりあげてみる。

しがの山越にて石井のもとにて物いひける人に別れける時よめ
る

むすぶ手のしづくににぐる山の井の

あかでも人に別れぬるかな（古今・離別・404）

此歌むすぶてのとけるより、しづくににぐる山の井といひて、あ
かでもなどいへる、大かたすべて言葉ことのつぎ、すがた心かぎ
りなく侍るべし。歌の本体はたゞ此歌なるべし。

と「歌の本体はたゞ此歌なるべし」と言いきつてゐる。俊成はまた
『民部卿家歌合』『慈鎮和尚自歌合』で次のように述べている。

歌は必ずしもをかしきよしをいひ、事のことわりをいひ切らむとせ
ざれども、ただよみあげたるにも、うち詠じたるにも、余情あり

て、景気うかび、なにとなく優にも艶にもあはれにもをかしくもきこゆることのあるべし

また、『六百番歌合』における判詞で俊成は次のように述べている。

小萱原吹き来る秋の夕風に

心みだれと鶉鳴くなり(鶉・二十番)

あまり慥かになりてかやうによむべしとならば歌道そんじ侍りなや。ただあはれなどこそいはめ

ありし夜の袖のうつり香消え果てて

又逢ふまでのかたみだになく(稀恋・一〇番)

逢ふまでかたみだになしといひはてたるぞ

憂きといへるよりも無念にみゆ

俊成は「あまり慥かにかやうによむべしとならば歌道そんじ侍らんや」「いひはてたるぞ……無念にみゆ」「ただあはれなどこそいはめ」と言っている。これは先にみた教長の庶機する和歌の理念である。「心ミナコトバニアラハレテ、カクレタルトコロモミエズ」「タシカニヨメリ」と対極にあるといえるであらう。

二 教長と俊成の業平受容

『貧道集』の歌の中に明らかに『古今集』の業平の歌をふまえていゝる次の和歌がある。

ことにあたりてあづまのかたにまかりけるに、おほいなるかは

のほとりにゆきてひもくれがたに、わたしもりはやわたらなむといそがせば、いとものがなしくてふねにのらんとするに、このかはをばなにとかなづくるとふに、これなむすみだがはといふは、むかし在中将のいざこととはむみやこどりとはみけむを思ひいでられて、きしかたゆくすゑものあはれることかぎりなくてよめる

①すみだがはいまもながれはありながら

またみやごとりあとだにもなし(貧・雑・825)

①の歌は『伊勢物語』第九段をふまえている

武蔵の國と下つ總くさとの中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて思ひやれば、限りなくとをくも来にけるかなとわびあへるに、渡守「はや舟に乘れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らんとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるおりしも、白き鳥の嘴はしと脚と赤き鳴しぎの大きな水、水のうへに遊びつゝ、魚いさなをくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなん宮こどり」といふをきいて、

名にし負はばいざ事とはむ宮こ鳥

わが思ふ人はありやなしやと(古今・羈旅・41)

右の教長と業平の詞書と歌は共にその状況の様が酷似している。保元の乱で崇徳院にくみした教長は広隆寺のあたりで敵につかまり、出家し、観蓮と号する。そして上皇方の有力な人物として常陸に遠流される。一一五六年、八月三日、教長四十八歳の時である。人生の最大の

失意の時、教長は心の中を絶唱するかのよう、業平の歌と呼応して詠んでいる。歌物語である『伊勢物語』の手法が、あまりに深い感慨を受け、それを表現する時に、教長にとつて最適であつたと想像できる。以下、『貧道集』より、常陸に流されたその一連の和歌をあげてみる。

とはきくにへつかはされる時、ひとの許へ云遣はせる

②おちたぎつみづのあわとはながるれど

うきにきえせぬみをいかにせん（貧・雑・824）

おなじみちにてのりかへにかけなる馬の侍りし、たづね侍りしかばあしをやみてさがりたると申し侍りしかば

③日のひかりてらしすてたるうきみには

かげさへそはずなりにけるかな（貧・雑・826）

かくてひたちの国までによそかあまりにまかりいたりぬ、いたらんずるところはしたのうきしまとなんまうす、うみのほとり
にふねにのりける時よめる

④ひをへてもすぎしみやこのつづきぞと

おもふきしべをけふぞはなるる（貧・雑・827）

ひたちになかりて侍りしおり、京に侍りける人のもとへ

⑤われながらしらすぎけりいかでかく

うきにたえたるみとはなりけれ（貧・雑・809）

①から⑤までの和歌と詞書から教長の呻吟が聞こえてくるようである。特に詞書におけるその時の状況説明が効果的である。自身の状況と心情とをあますところなく写實的に表現するために、具体的に自身の置かれた状況を「タシカニ」表現しているところに、切迫してくる真実味があり、読む者の心を打つ。かくして教長は七年間を常陸で送る。そして応保二年、三月七日、教長五十四歳の時、赦免され、召還。その後しばらく在京する。ところが長寛二年、教長五十六歳の時、崇徳院が松山にて崩御し、ほどなく教長は高野山に登り、隠遁する。その頃に詠まれた歌が以下あげる三首である。

京やすみうかりけん、あなかなるやまでらへまかるみちにしづのかきねなるむめのかうばしければよめる

⑥いなしきもかきねのむめのかをるかは

はなのみやこにかはらざりけり（貧・春・77）

京やすみうかりけむ、あなかなる山でらにまかりて、みやこを
思ひいでて人の許につかはしける

⑦すみなれしおもひのいへをあくがれて

さらぬわかれのかどでをぞする（貧・雑・956）

修業に出で待るとてものの許へ云ひつかはしける

⑧のちにはんことはのちとききしかど

のこりすくなきみをいかにせん（貧・雑・804）

⑥⑦⑧の詞書は『伊勢物語』の八段の「京や住み憂かりけん、あづまの方に行きて住み所もとむと」や、九段の「身をえうなき物に思（ひ）なして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき國、求めにとて行きけり」や、十一段の「あづまへ行きけるに、友だちどもに、みちよりいひおこせける」や、五十九段の「京をいかゞ思ひけん、東山に住まむと思ひ入りて」等と呼応する。先の①から⑤までと同じく教長は京を離れ田舎の山寺にこもる決意をし、京を去る時、そのあり様を詞書に、自身の心情を「京やすみうかりけん……」と述べ歌を詠んでいる。それは『伊勢物語』に多分に傾斜して叙述している教長の手法がうかがえる。

次に、俊成はどうであろうか。『古来風体抄』に業平の朝臣の歌として

日やあらぬ春やむかしの春ならぬ

我身ひとつはもとの身にして（古今・747）

月やあらぬといひ、春やむかしのなどつゞける程のかぎりなくめでたき也。

と述べている。この歌は『伊勢物語』の第四段にみえる。

むかし、東の五條に大后の宮おはしましける。西の對に住む人有（り）けり。それを本意にはあらで心ざしふか、りける人、行きとぶらひけるを、む月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、猶憂しと思ひつゝ、なんありける。又の年のむ月に、むめの花ざ

かりに、去年を戀ひて行きて、立ちて見、あて見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思（ひ）いでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのくさりと明るるに、泣く／＼歸りにけり。

右の業平の歌は『古今集』の序に「在原業平は、その心あまりて言葉たらず」として説明されている。恋歌の余情のたちのぼる一首である。俊成はまた、自讃歌中の自讃歌として次の一首を自身の代表歌としてあげている。

百首歌たてまつりける時、秋のうたとてよめる

夕されば野辺のあきかぜ身にしみて

うづら鳴くなりふか草のさと（千載・秋・259）

俊成が『慈鎮和尚自歌合』で「伊勢物語に深草の女の鶉となりていへることをはじめてよみ侍りし」と述べているごとく、百二十三段に以下のくだりがみえる。

むかし、をところありけり。深草にすみける女を、やう／＼あきがたにや思（ひ）けん、かゝる歌をよみけり。

年をへて住みこし里を出でていなば

いとゞ深草野とやなりなん

女、返し、

野とならば鶉となりて鳴きをらん

かりにだにやは君は来ざらむ

とよめりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりにけり。

「野とならば……」の歌は今に通つて来なくなつた人を恋い続けるあわれで寂しい、しかも艶なる女の情趣を詠んでいる。俊成はその歌を本歌として「夕されば……」の歌を詠みこんでいるのである。先の「月やあらぬ……」といい、俊成の『伊勢物語』受容は恋歌の情趣にあふれたものをその根底にすえている。

先にみた、教長の『伊勢物語』受容は、俊成と異なり、恋歌的な様相はみられない。教長は自身の危機的状況にある立場や心情を述べる時、『伊勢物語』の描写方法なり内容を大いに参考にしてゐる。同じ業平を評価する時の視点は教長と俊成において、その対極にあるとみてよからう。

三 教長と俊成の「あはれ」観

これまで、教長と俊成における貫之と業平の受容態度を比較するなかで、それぞれの求める歌風がかなり異なる、むしろ対極的にあることをみてきた。それではその二人は、「あはれ」をどのように、何にものあはれを感じているかに視点をあて、両者の違いを明らかにしてみたい。

『貧道集』に次の二首がある。

山寺にてむつきのついたちによめる

はるくればはなにころをつげしかど、

いまはちすのむかへぞまつ（貧・春・192）

おなじ日のあかつきにきつねのなくをききてよめる
きく人のさかゆといへばよをさむみ

なくなるきつをあはれとぞきく（貧・春・193）

二首を合わせて考えると、教長がどういう状況のうちに、きつねのなくのを「あはれ」と感じていたのかがうかがえる。今はちすのむかえを待つばかりの老齢の深くおりたつた一月一日のあかつきに聞こえたきつねの声、その寒い朝に教長の胸に響くのは、正月を迎えて花に心を向ける例年の新春の嬉しさではなく、どこか自身の姿と重なつてみえる寒い野にいるきつねの声である。そのきつねのなくのを「あはれ」と聞いている。

それでは他にきつねを歌材として詠んだものにどういう歌があるか以下あげてみる。

きつね

①さしなべにゆわかせこどもいちひつの

ひばしよりこむきつにあむさん（万葉・3846、末木・12030）

きつね川、未国 文応元年七社百首

岩清水 民部卿為家

②とにかくに人の心のきつねがは

かげあらはれん時をこそまて

野干

百首御歌、猷 土御門院御歌

③きつねだにかけをうかがふ山河の

氷の上をふみてのみ行く (夫木・13027)

百首歌、獣五首中 藤原為顕

④華を見る道のほとりのふるぎつね

かりのいろにや人まよふらん (夫木・13028)

六帖題、新六一 信実朝臣

⑤人も見ばあなしらしおいぎつね

いとどもひるのまじらひなせそ (夫木・13029)

十題百首御歌 後京極摂政

⑥ふるさとの軒のひはだは草あれて

あはれきつねのふし所かな (夫木・13030)

同 寂蓮法師

⑦相坂の夕つけどりをもとむとや

つかをはなれてきつねなくなり (夫木・13031)

同 前中納言定家卿

⑧つかふるききつねのかれる色よりも

ふるきまどひにそむる心よ (夫木・13032)

また『伊勢物語』第十四段に

⑨夜も明けばきつにはめなでくたかけの

まだきに鳴きてせなをやりつる

以上十首である。①と⑨はきつねに湯をかけようとしたり、水槽にぶちこんでやろうと、むしろ危害を加えようとする対象となつてゐる。②③④⑤は現代のきつね観に似、人をだます狡猾なきつねのイメージが浮かびあがるような歌である。⑥⑦はそれまでの歌と印象が異なる。ふるさとの草荒れた様子を描写するために素材としてきつねを詠みこんだり、夕つけ鳥を求めて鳴くきくねの姿を詠み、これまですに擲揄の気持ちは全くない。

以上、①から⑦までの歌と教長の歌とを比較してみる時、教長の「きく人のさかゆといへばよをさむみなくなるきつをあはれとぞきく」は同じきつねを素材にしつつも、その描こうとする情趣は他に追隨を許さぬほど深い。

また教長が「もののあはれなることかぎりなく」と詞書で述べている箇所がある。

ことにあたりてあづまのかたにまかりけるに、おほいなるかはのほとりにゆきてひもくれがたに、わたしよりはやわたらなむといそがせば、いとものがなしくてふねにのらんとするに、このかはをばなにとかなづくるとふに、これなむすみだがはといふは、むかし在中将のいざこととはむみやこどりとよみけむを思ひいでられて、きしかたゆくすゑものあはれなることかぎりなくてよめる (貧・825の詞書)

右の文章は先の教長の業平受容のところ、この詞書の背景、つまり教長の状況を述べたように、保元の乱の後、常陸に流されていく途

上、隅田川を渡る時に詠んだものである。この先見知らぬ東の土地で暮らさねばならない悲嘆の極みの中、今後どうなるかわからない我が人生、またこうやって流されてゆくことになったいきさつを思い起こすにつけ、あはれなること限りなく身に迫る。深い嘆きの吐露である。

以上、二首の歌を通して言えることは、教長が「あはれ」を歌に詠む、その動機は、自身の心の底を見すえる時、悲哀とともに我が人生をふり返り返る姿であるといえようか。また素材としてきつねを詠みこんでいる歌もあり、教長の特異性がうかがえる。

さて、次に俊成をみてみると、『長秋詠草』に次の歌がある

左大将の家に会すとて歌くはふべきよしありて

恋せずは人は心もなからまし

物のあはれもこれよりぞしる (恋・352)

俊成は、恋する心こそが物のあはれを知ると言いきっている。俊成の「物のあはれ」観が如実にうかがえる一首であり、このことはまた、先に貫之、業平の頃でとりあげた俊成の庶機する和歌観の根底に流れる考えと呼応している。俊成が『古来風体抄』でとりあげた貫之の「むすぶ手の……」、また業平の「月やあらぬ……」の二首は共に恋の情趣が俊成いうところの「ただよみあげたるにも、うち詠じたるにも余情ありて、景気うかび、なにとなく優にも艶にもあはれにもをかしきこゆる」歌であろう。恋する心こそがなにとなく優にも艶なる余情をたちのばらせてゆく契機となる。俊成の和歌観の眼目は恋歌にあるといえよう。

以上、教長と比較するとその両者の違いは歴然としていることがわかる。

歴史上の人物として、社会の動乱に巻きこまれ否応なくすさまじい現実の波を身にかぶり生きねばならなかった教長は、俊成いうところの「なにとなく優にも艶にも」の歌は体質的に詠めなかったのではあるまいか。教長の「あはれ」観は、自己の現実に立脚した求心的なまなざしの中で「心ミナコトバニアラハレテ」「タシカニ」詠んでいく詠風にこそあつたといえよう。

四 晩年の生と死

教長が最晩年に詠んだ歌は、教長の人生の総決算として和歌との関係を集約して示していると思われる。次にあげる二首はその中でも特に和歌に対するありようを表白している。

齡及七旬、情迷六義、然而猶携君之風骨、養我之露命、再遇中興之節、將動下愚之性而已

①としよれるおもてのなみもわすられて

こころはわかのうらにかへりぬ (貧・雑・947)

静蓮が許より申しつかはせる

老いはててみやまがくれにすむまでも

わかこのころのうせぬかなしき

かへし

②くちはててたにのそこにはむもるとも

わかきのはなをいかがわすれむ (貧・雑・966)

教長は治承四年、七十二歳頃に亡くなる。

①の詞に「齡及七旬」にあるところから、この歌は教長の七十歳頃の和歌に対する思いを述べているとみてよい。教長の心はその最晩年「和歌の浦」により所を求めており、その姿勢は②のところで静蓮が「和歌の心の失せぬ悲しさ」と詠んでいるのとは対称的である。

教長は静蓮との、その贈答歌の返しに「朽ち果てて谷の底に埋めれようととも和歌の木の花をどうして忘れようぞ」と、どんなに老齡が自分を朽ち果てさせようと和歌の心だけは忘れまい。むしろよりどころとして積極的に和歌を受容し、最後まで和歌の花を教長の人生に咲かせようとする決意のほどが感じられる。

これは教長の『古今集註』の四七番の歌の註に「然則以和哥戲論之奇語、翻蓋爲菩提涅槃之良縁」とあるところから、平安末期の狂言綺語観を教長も持っていたことがうかがえる。『和漢朗詠集』に

願くは今生世俗の文字の業狂言綺語の誤りをもつて、翻して當来

世々讚佛乘の因、轉法輪の縁とせむ 白

とある。教長もまた謡らぐことなく和歌をもつてして「菩提涅槃之良縁」「當来世々讚佛乘の因轉法輪の縁とせむ」としたのである。

その教長がどのような歌を詠んでいるか、次にあげてみる。

述懐

③かぞふれば身はななそちをへぬれども

またみどりこのころなりけり (貧・雑・912)

東山辺にて無常歌とてよめる

④つひに行く道とはよそにききしかど

われにてしりぬきのふけふとは (貧・雑・932)

無常不嫌人

⑤よのなかにあるかひあるもかひなきも

いづくはつひにとまるためしは (貧・雑・934)

ここそこなひてたのものしげなくおほえけるにほととぎすの
なくをききて

⑥しでの山われはこゆまじほととぎす

ただここにてを声をつくしてよ (貧・雑・939)

年おいぬれどいままでまかりかくれぬをなげきて

⑦つゆのみのいままでいかにきえざらん

あけぬくれぬとおきぬふしぬと (貧・雑・940)

をはりのためにとしめたりけるやまざとのあひたがふことあり

てたちさりけるときよめる

⑧つゆむすぶくさのいほりもあくがれて

おきどころなきみをいかにせん (貧・雑・944)

物へまかりけるに船岡のほとりをすぐるに、たかきいやしきつかどものひまなきをみて

⑨みな人のはてはよもぎふこけのした

さかえしやどはいづくなるらん (貧・雑・942)

九月尽をよめる

⑩おいはてはてはやまひにしづみぬる

わがみもあきもかぎりなりけり (貧・秋・526)

としもおいやまひおもくなりぬればしづかなる山ざとたづねあるきてよめる

⑪いまはとてつゆのすみかをたづぬるや

うきをはなるるかどでなるらん (貧・雑・943)

としもおいやまひもせはしく北山のほとりにこもりをるころに人人きたれる、なごりむつかしきことどものありければよめる

⑫いまはとてたちまじろはぬみやまべも

まさきのかづら猶ぞくるしき (貧・雑・955)

やまひおもくて、さすがにいきばかりはかよひてひさしくなり
にけりをり、もといひなれたることなればかくなんよめりける
⑬いきもせずしにもやられぬものゆゑに

なにとさえやらぬつゆのいのちぞ (貧・雑・945)

かくてみまかりにけりとぞ

以上、③から⑬までの歌を続けて読んでみると、ひとつひとつの歌が次から次へ響き合い、個々の独立した歌というよりはまるで歌物語の様相が感じられる。

③は七十歳になつても今だ「みどりごのころ」を保っている初々しい精神性を持つ教長がそこにいる。だからこそ、①で詠まれたように、齢が七旬に及んでも和歌の世界に喜びを持って遊び、和歌の花を咲かせる水々しい気持ち^④が止むことなくあふれてくるのであろう。

④は『伊勢物語』百二十五段の「わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、つゐにゆく道とはかねてき、しかどきのふ今日とは思はざりしを」を本歌として^⑤いる。ここでもやはり、教長が業平歌を受容する時は、恋歌でなく、まさに無常を感じさせる死を見つめる歌である。③でみたようにどんなに「みどりごの心」を持っている教長も肉体的に迫りくる死を諦念を持って向きあわねばならない年齢にいることを自覚し、「きのふ、けふ」、いつ死んでもおかしくない覚悟に近い心情を詠んでいる。

⑤そしてそれは、どのように充実した生きがいのある人生を経てきた人もそうでない人も誰もついにこの世に生き続けた人のためしはないと、さまざまな人生の背後にある死を見つめている。

⑥は病気になり不安になっている時に聞くほととぎすの声。それは死出へと導くように聞こえてくる。「ただここにてを声をつくしてよ」とほととぎすに呼びかける教長のせつばつまった心の声が、ほととぎすのひと鳴きと共に聞こえてくるような歌である。

⑦は⑤⑥の歌でみたきたように、すでに死を迎える心の諦念が出来ており、「きのふ、けふ」「あけぬくれぬ」「おきぬふしぬ」と、日々刻々と死をみつめ、むしろ待つている姿は④⑤⑥の死への心の準備をしていた段階を一挙に飛び越え、しかも「まかりかくれぬをなげいて」いる教長である。

⑧はどこか自身の終生の場所として山里の庵に身をひそめようとしたのであろうか。ところが、そこで人と「あひたがふことありてたちさり」「おきどころなきみをいかにせん」と、死の淵に立っけていても、安らいで死ねる場所すら見つからない嘆きが詠みこまれていて哀切である。

⑨そして、教長のまなざしは船岡山の、「みな人のはてはよもぎふこけのした」である「たかきいやしきつかどもひまなき」人の最終的な行き場所である墓に心が向けられる。

⑩九月の終り、教長はまさに「老いはてて」「病に沈み」「わがみも秋も限りなりけり」と、季節の終りと自身の終焉を重ねている。

⑪は「老いもやまいもおもくなり」、「いまはのつゆのすみかをたづね」、「うきをはなれる」場所を求めて山里を歩く教長である。

⑫はその老いと病いが⑪では「おもく」あつたのが、この世から追いたてられるかのごとくいよいよ「せわしく」なる。この辺の描写は写実的である。

⑬は教長の辞世の歌である。「さすがにいきばかりはかよひてひさしくなりにけるをり、もといひなれたることなれば」と、息もたえだえであるなか、自らの命をみつめて謳いあげる教長の最後の歌、「いき

もせずしにもやられぬものゆゑになにときえやらぬいのちぞ」は、死との激しいせめぎあいの中で命の果ての果てまで見極めてゆこうとする生と死の境界線上で詠んだ歌であるだけに、教長の臨終の場面が浮かびあがってくる気がする。

以上④から⑬までの歌をみてみると、教長のすさましいまでに自己の命を見つめつくそうとするリアリズム的な気概が感じられる。老いの行き着き先である病いと死は何者ものされることは許されない。等しくこの世との訣別にあたって向きあわねばならない人生の実相である。教長はその命の迫り着く風景を詞書をたくみに駆使し、一刻一刻死へと旅立っていく様子を和歌に昇華している。「以和哥戲論之奇語、翻蓋爲菩提涅槃之良縁」をまさに教長は生ききったといえるであろう。

おわりに

教長は俊成に『正治奏状』で「教長も清輔も源氏を見候はず」と評されている。それは教長の『貧道集』全体の印象を思うとき、やはりまぬがれない事実であろう。「よみあげたるにも、うち詠じたるにも、余情ありて、景気うかび、なにとなく優にも艶にせあはれにもをかしくもきこゆること……」からは全くかけ離れ、その対極にあるところの「心ミナコトバニアラハレテ、カクレタルトコロモミエズ」「タシカニ」詠んでいる歌が多い。

それは一つの、もとよりのその人の歌人としての資質が詠風に反映

していくことは誰にあつてもいえる創作上の体質に関わる問題である。そしてやはりもう一つ言えることは、その歌人の人生体験が鏡のようにその詠風に反映していくこともいかなめない事実であらう。

教長の人生はまさしく保元の乱によつて、まっさかさまに暗転する。その心情を和歌にたくする時、よもや「何となく優にも艶な」境地に立つことはできなかった。「伊勢物語」の中でも都落ちしていく場面や、老いと死を描いた場面に教長は自らの臨場感を重ね合わせていく。そしてより鮮明にくつきりと自らの心情と状況を浮かびあがらせるために、詞書を最大限に活用した点が大きな特徴である。

教長の和歌は悲痛の叫びをもらす時に最もその存在がたちのぼって迫ってくる。それはほかして表現する手法では決して表現しきれない世界である。ここに私は平安末期の動乱期を生きた教長の和歌の意義があると思う。

註

- (1) 『佛敎大学大学院紀要』第二十四号「藤原教長論——古今和歌集註の検証を中心に」で発表した論文に詳しくその辺のところは述べている
 - (2) しほの山さしでの磯にすむ千鳥君がみ代をばやちよとぞ鳴く(賀・よみ人しらす)
 - (3) 『正治初度百首』の出詠者として後鳥羽院に定家を推薦するために『正治二年俊成卿和字奏状』を著した。ここで俊成は定家の推薦の理由として『源氏物語』にすでに堪能であることを強調している。
 - (4) ちるとみであるべきものを梅の花うたてにはひの袖にとまれる(春上・素性法師)
- 「コノウタ、詞ツツヤカニ、心ヒロキ哥ナリ。……不空羅索」巻ノ

經二利益ノ不思議ヲトクニ、タトエバ人アリテ麝香ヲトリテ、ニクミテステツレド、ソノカテニトマレルガゴトク、經の利益、コレヲ謗ズルヲモ縁トシテ、ホトコサント、ケリ。モノ、香ノウツルコト、カクノゴトシ。梅ノチルトバカリミルベキニ、カクウタテソデニトマレルトヨメリ。然則以和哥戲論之奇語、翻蓋爲菩提涅槃之良縁。況乎大日周遍之戒香者、一春梅花之芬芳也。一色一香無非中道之故、豈此議遺哉。

(5) 『栄花・疑』の藤原道長が行った法華經の講会について、「殿ばら、僧達、經の中の心を歌に詠み、文に作らせ給ふ……又願はくは今生世俗文字の業、きやうけんきよの誤をもて、かへして当来世々讀仏乘の因、転法論の縁とせんなど誦し給ふも尊く面白く」とある。また『梁鹿秘抄』の法文歌に「狂言綺語の誤ちは、佛を讀むる種として、鹿き言葉を如何なるも、第一義とかにぞ歸るなる」とあり。

『沙石集』序にも「夫鹿言軟語ミナ第一義に背ズ。然レバ狂言綺語ノアダナルタハブレラ縁トシテ、佛乘ノ妙ナル道に入シメ、世間淺近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思フ。」とある。

(6) 『古今集』861番の詞書では「病して弱くなりける時」とあり、『伊勢物語』のわづらひて、心地死ぬべくおほえければの方がインパクトが強い。

(にしむらようこ)

文学研究科 国文学研究員
(一九九六年一〇月一六日受理)

